

## 眺望

ビルの最上階から眺める都市は  
電子基盤の上に並べられた回路のように  
ある規範をもって息づいていた

信号とカーナビと  
経済と社会と  
法律と

電子のように活動するもの  
化学反応のように進む再開発  
ある部分では腐食するまま

私、という思いが  
この眺望のどこに潜り込めるのか  
この回路のどこに生き続けることができるのか

自動的にはめ込まれ  
自動的に働かされ  
自動的に生かされてゆく 知らず知らずのうちに

向かい合った鏡の間に立った時のように  
無限に映される、私  
その虚像の全てを使役されている

ビルを下りて通りに出ると  
人々はそれぞれの顔を確認に持っていた  
Aであり、Bであり、Cであった・・・

いや、正確には  
Aの像であり  
BやCの像であった

彼らの本体は一体どこにあるのか  
おそらくそれは  
彼ら自身にもわからなくなっている

“ 消去しても差し支えは無い

ひとつの像を消すだけだ  
本体が消えるわけじゃない・・・“

その時  
リカバリーが働いたらしい

サイレンが鳴っている

(2007.1.3)